



産総研の研究者よ！ 取りに行こう！

小野田 武 産業技術総合研究所 監事

新産業技術総合研究所は、その名称に相応しい「産業技術競争力の強化」「エネルギー・環境技術」「知的基盤の確立」の3大ミッションを掲げている。そのいずれの推進においても、産業と産業技術の「今」を知らなくてはならない。産業における技術開発と製造の人と現場に触れ、その息吹を肌で感ずることなしには産業技術の将来を洞察し、産総研のミッションを果すことは困難であろう。

これからの産総研においては、社会と産業との多面的な連携活動が飛躍的に拡大推進されて行くことが計画されている。社会と産業に向けて研究所を開き、研究所を知ってもらい、親しんでもらうこととともに、社会と産業を知ることのどちらを欠いても適切な連携と成果はおぼつかない。もっとも肝要なことは、研究者自身が座して待つのではなく、自ら取りに動き、五感の全てを開放して対象の「今」を肌で感ずることではなからうか。

研究者の日頃の研鑽の知的成果と外界の刺激とが共鳴したとき、そのときこそ金を取り

に行く(国からの研究資金も含め)、また、取ることができる知恵が生まれる。

本来、あらゆる仕事を通じて金の獲得ほど高次の戦略と戦術を必要とし、苦勞の多い作業はない。筆者の経験からも、その苦勞に比べたら研究活動自体の苦勞はさしたるものではない。金の獲得に迫られたとき、脳細胞は

激しく活性化し、知恵がグレードアップする。仕事の内容の真の優劣が顕在化するのもこの段階である。

棚ボタの金による研究成果と闘い取った金による研究成果とでは、前者が勝った事例はほとんどない。幸いなことに、産総研

の研究者は、ようやくその持てる優れた脳細胞の潜在能力を存分に発揮できる環境を獲得したと言えるのではないだろうか。

マネージャーやリーダーは、なるべく若手の研究者を連れて歩こう。マネージャー職務やエージングというものは、自覚症状なしに感性の低下をもたらす宿命がある。新産総研のミッション達成のためには、決して出張旅費をケチる愚を犯すことのないように！

何を？

**もちろん
情報と資金!**